

オルケストラ シンフォニカ 東京

第 61 回

定期演奏会

2021 年 4 月 11 日 (日) 午後 2 : 00 開演

第一生命ホール



O S Tについて

O S Tの活動は大きく3つの時代に分けられます。

第1の時代は1915（大正4）年に武井守成*1がシンフォニア・マンドリニ・オルケストラ（1923（大正12）年オルケストラ・シンフォニカ・タケキと改称）として楽団を創設しことに始まり、多くのマンドリン曲を紹介し、合奏コンクールや作曲コンクールを実施するなど斯界をリードしました。1949（昭和24）年武井氏逝去により活動は次第に終息していき、1958（昭和33）年に解散となりました。この間57回の演奏会が開催されました。

第2の時代は武井氏ご遺族より貴重な武井文庫の蔵譜と楽器を譲り受けた杉田村雄*2が理事長として1959（昭和34）年にオルケストラ・シンフォニカ・タケイを復興し、始めました。杉田氏が支配人を務めていた日比谷皇居前の第一生命ホールを会場に毎年の演奏会を重ね、またその場ではギターの優秀な作品に贈られる武井賞の受賞作品も演奏されました。1986（昭和61）年の杉田氏逝去に伴い、翌1987年開催の追悼の意を込めた演奏会（定期28回目）で幕を閉じます。

第3の時代は残された団員の合議により幹事制の下で民主的に運営することが決められ始めます。その際に杉田氏ご遺族よりマンドローネ・リュート・セロなどの楽器と杉田氏が収集した楽譜を団として譲り受けました。武井文庫は、当時日本マンドリン連盟理事長でO S T団員でもあった市毛氏のご尽力で国立音楽大学図書館に寄贈されました。また、武井氏ご遺族より楽団名「O S タケイ」の改称のご要望があり、それに従い「O S 東京」と改称して、1988（昭和63）年の定期演奏会（第29回）を開催しました。これが現在へとつながります。

本日は杉田氏が復興した演奏会より第61回目となります。毎回定演後の最初の活動日に総会が開かれ、すべての事項を決定します。任期2年の幹事団が代表幹事を中心に通常の運営を担当します。指揮者は現在会員の互選によって選ばれています。練習日は杉田氏の時代より毎月第2日曜で固定していて、新加入に関しては団員の了解の下で随時受け入れています。

* 1) 武井守成（たけい もりしげ：1890年10月11日～1949年12月14日）

枢密顧問官武井守正の二男として鳥取に生まれる。宮内省楽部長・式部官長、男爵。

マンドリン合奏団「オルケストラ・シンフォニカ・タケキ」（O S T）を主宰し、マンドリン合奏曲・ギター独奏曲の作曲家として活動。また雑誌「マンドリンギター研究」を発刊し、1923年にマンドリン合奏コンクール、1924年に作曲コンクール、1927年にはマンドリンオーケストラ作曲コンクールを開催してマンドリン・ギター音楽の発展に尽力した。

* 2) 杉田村雄（すぎた むらお：1903年2月14日～1986年7月17日）

八王子・南多摩郡多摩村の村医杉田武雄の長男として生まれる。

暁星中学時代、クラスメートの斉藤秀雄とともに比留間賢八に師事、2人で暁星マンドリン倶楽部から静美社音楽部へと音楽活動を進める。

1939年O S Tに入団。戦時中、武井守成氏の多摩村東寺方への疎開に尽力し、音楽関係楽譜・資料も戦火を免れる。

武井氏逝去後、O S Tの再興にあたり理事長および指揮者を務める。武井氏の楽譜出版に尽力。日伊音楽協会理事長、日本マンドリン連盟副会長を歴任し斯界に貢献された。

◆ ◆ ◆ プログラム ◆ ◆ ◆

第一部 指揮：嶋 直 樹

1. 弦楽セレナーデ より エレジー P. I. チャイコフスキー (嶋 直樹編)
2. ヴァイオリンソナタ第21番ホ短調 K304 より W. A. モーツァルト (嶋 直樹編)
第2章 メヌエット
3. ハンガリー舞曲集より 第3番 J. ブラームス (嶋 直樹編)

第二部 指揮：石井 啓 之

1. 「荒城の月」を主題とせる変奏曲より 武井守成
(ギター独奏 演奏：小林 透)
2. 星を見る 武井守成 (石井啓之編)
3. 月 貴志康一 (嶋 直樹編)
4. 月に舞う 武藤理恵

《 休 憩 20 分 》

第三部 指揮：山本 雅 三

1. フィンランディア組曲 H. アンブロジウス
 - I. アンダンテ・リズムック
 - II. ヴィヴォ
 - III. アンダンテ
 - IV. アレグロ ヴィヴァーチェ
2. バラライカの思い出 J. B. コック
3. 組曲「北欧のスケッチ」 A. アマデイ (中野二郎編)
 - I. 遙かなる未知の国への旅
 - II. 懐郷のワルツ
 - III. ロシア舞曲

曲 目 解 説

第 一 部

エレジー

P. I. チャイコフスキー

ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー（1840年～1893年）の弦楽セレナーデの第3楽章として書かれた曲です。当時のヨーロッパ音楽が表面的で芸術的価値が乏しいと批判的であったチャイコフスキーが、自ら敬愛していたモーツァルトの精神に立ち返るという考えで作曲したと言われています。OSTでは過去、第51回（2010年）に第1楽章（蔦谷悦子編）、第59回（2018年）に第2楽章（嶋編）を演奏しました。エレジーとは悲歌、悲しみを表現した曲ですがこの楽章は長調で作られており、壮大な広がりをもイメージさせるものです。

メヌエット

W. A. モーツァルト

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト（1756年～1791年）が、1778年頃に作曲したヴァイオリンソナタ第21番ホ短調の第2楽章です。この時期にモーツァルトは最愛の母を亡くしており、その影響からか明るい曲が多い彼の作品の中では数少ない短調で作曲されています。タイトルはメヌエットとなっていますが、しっとりとした思いの籠ったものとなっています。

ハンガリー舞曲集より 第3番

J. ブラームス

ヨハネス・ブラームス（1833年～1897年）がジプシー音楽を採譜してまとめた編曲集（全21曲）のうちの1曲を演奏します。最初はピアノ連弾のために書かれていましたが、数多くの編曲がなされています。この3番はブラームス本人によって管弦楽版に編曲されました。編曲集のため作品番号は振られていません。小品ですがマンドリン2台（原曲ではオーボエ）の軽やかな旋律が特徴の佳曲です。

（文責 嶋）

第二部

今回の第二部のテーマは、月（星）です。

「荒城の月」を主題とせる変奏曲より

武井守成

武井守成（1890年～1949年）が、1944（昭和19）年に作品番号90番のギター独奏曲として作曲しました。主題となる滝廉太郎の「荒城の月」は、日本で作曲された初めての西洋音楽の曲とされ、日本音楽史上非常に重要な曲です。その旋律を主題として武井は、序奏、主題、第1から第7までの変奏、コーダを作曲しました。今回はその中から序奏、主題、第3変奏、第7変奏、コーダを演奏します。

星を見る

武井守成（石井啓之編）

1948（昭和23）年に開催された第1回全国ギターコンクールで1位に輝いた阿部保夫のために作曲されたギター独奏曲（作品番号112）です。OSTではギター独奏で第52回（2011年）に演奏していますが、今回はこれをマンドリンオーケストラで演奏いたします。

月

貴志康一（嶋直樹編）

貴志康一（1909年～1937年）は、16歳でヴァイオリニストとしてデビューし、数度のヨーロッパ留学を通じて音楽の研鑽に努め、演奏家、指揮者、作曲家として活躍しました。この曲は、1934（昭和9）年にドイツで出版された、「ヴァイオリンとピアノのための作品」の第1曲です。緩急により月の妖しい美しさと狂気が見えてくるようです。マンドリンオーケストラ用に編曲して演奏します。

月に舞う

武藤理恵

月の神の手をすり抜けて人間界に降りた妖精は、若者と禁じられた恋に落ちてしまう。やがて月の神の知るところとなり、彼女は掟に背いた者として永遠に年を取ることなく、月の世界で舞い続けることを命じられる。

曲は、月の神の存在を示す口短調のマンドラの旋律から始まる。その後続くマンドリンソロには、彼女の嘆きと舞うことへの覚悟が集約されている。ゆるやかに流れる悩ましげな主旋律は3/2拍子から6/8拍子に変わり、舞にも動きが加わる。4/4拍子からは、主旋律

と並行して冒頭の月の神のテーマが勢いを伴い現れる。小節ごとに拍子が変わることで高揚感が生まれ、アップテンポとなったところで突然舞が止まる。

中間部のマンドリンソロは、彼女が人間界に降りたときの妖精の心を再現。ニ長調に転調し、若者と過ごした愛おしい日々が甘美な音楽と共に甦る。彼女との記憶を消された若者が、ふと月を見上げる時にだけ彼女に与えられる、至福の贈り物である。彼が月を見上げることをやめたその時、曲はロ短調に戻り、彼女の舞は再び始まる。哀しく激しく狂おしく、月に舞うのである。

(作曲者による解説)

(文責 石井)

第三部

フィンランディア組曲

H. アンブロジウス

I. アンダンテ・リズミック

II. ヴィヴォ

III. アンダンテ

IV. アレグロ ヴィヴァーチェ

著名なシベリウスの交響詩と同名ですが、こちらはマンドリン合奏のために書かれた作品です。作曲者のドイツ・ハンブルク出身のヘルマン・アンブロジウス（1897年～1983年）は第2次世界大戦前に交響曲、協奏曲、カンタータなど一般音楽を多く作曲し、戦後は主にマンドリン音楽の分野で評価され、イタリアを凌ぐ発展を見せたドイツマンドリン音楽の興隆に貢献しました。バンドネオン、チターなどとの関わりもあり、民衆や民族の音楽に関心が深かったようです。古典的な組曲の形式をとっていますが、内容は曲の途中で2拍子と3拍子が入れ替わる変拍子を多用し、現代的な響きにあふれています。トレモロが極めて少なく、ピッキングで単音を主体としていることも特徴です。

バラライカの思い出

J. B. コック

北ヨーロッパをテーマとした第三部の選曲過程で、OSTの蔵譜の中から見つけ取り上げました。OSTとしてはほぼ半世紀ぶりの演奏となります。作曲者はオランダ出身のヨハン・バプテスタ・コック（1889年～1954年）で、ヴァイオリン奏者からのちにマンドリンの名手

となり、「魅惑島」「マンドリニストの生活」「ギリフラワー」など多数の作品を残し、オランダのマンドリン界を盛り上げました。バラライカは三角形の胴体が印象的で、3本の弦を右手の指で弾いて演奏するロシアの楽器です。撥弦する民族楽器としてはマンドリンの親戚と言えるでしょう。我が国ではかつて歌声喫茶の流行もありよく耳にした「ボルガの舟歌」や「黒い瞳」などのロシア民謡を彷彿とさせる曲想にノスタルジーを覚える方も多いと思います。

組曲「北欧のスケッチ」

A. アマデイ（中野二郎編）

- I. 遙かなる未知の国への旅
- II. 懐郷のワルツ
- III. ロシア舞曲

「海の組曲」をはじめとしてロマンチックな作風で20世紀初頭のイタリアマンドリン黄金期を築いた代表的な作曲家アメデオ・アマデイ（1866年～1935年）の作品ですが、元は管弦楽曲です。それを我が国の斯界に膨大な作編曲で偉大な足跡を残した中野二郎先生（1902年～2000年）が編曲されました。編曲譜に添えられた先生の解説を以下に抜粋します。

アマデイ家はピエトロ、ロベルト、アメデオと三代続いたイタリアの著名な音楽一家。40以上の作曲コンクールに入賞。作品も多岐に亘り^{わた}管弦楽曲、吹奏楽曲、合唱曲、歌曲、ピアノ曲、室内楽曲、マンドリン合奏曲を含めて約500曲ある。

マンドリン合奏曲への創作は既に1897年頃から始められているが1906年ミラノのイル・プレットロ主催の作曲コンクールに「プレクトラム賛歌」が受賞して以来判明しているだけでも90曲以上ある。中でも「海の組曲」は応募曲81曲の中から一等に選ばれマルゲリータ皇太后の大金牌を与えられたことは名高い。1935年彼の死を伝える報道の中に最後の作品がAcquerelli Nordiciという管弦楽曲であることを知り、以来40年間その出版社を模索していたと云っても大袈裟^{げさ}ではない。昨年夏在伊の同志社大学マンドリンクラブの指揮者であった岡村君を通じ、アマデイの未亡人及びその娘カルラに連絡がとれ、再三懇願^{こうがん}して漸く出版されたこの曲を病床で眺めて逝いたとのことである。旧アルモニア誌で沢口氏は本曲を「ノルウェイの水彩画」と訳しているが、印刷された独、仏、伊、三カ国語の表題から私は之を「北欧のスケッチ」と改めた。期待通りの佳曲であったのでカルラの了解を得て編曲したのが本曲である。このことはまだ糾^{きり}してないが作者は北欧に旅したことなくこの曲を書いたような気がする。「北国指して」とか、望郷の思いを托したこの作品は既に作者は死を予知した者のように私は考えられる。

（『マンドリン古典合奏曲集第9集』より）

（文責山本）

出 演 者

指 揮 者：山 本 雅 三 嶋 直 樹 石 井 啓 之

コンサートマスター：田 中 尊 子 小松崎美奈子

第一マンドリン：田 中 尊 子 内 野 典 子 田 島 明 子 本 間 輝 樹
小松崎美奈子 高 嶋 明 美 大 口 千 秋 高 嶋 淳

第二マンドリン：富 田 容 子 木 村 栄 子 中 村 順 子
鈴 木 園 子 後 藤 俊 明 高 嶋 友 美

マンドラテノール：新 谷 文 子 滝 田 ふ さ 子 伊 藤 安 子 ★鈴 木 憲 靖
宮 崎 俊 行 田 中 倭 文 子 関 谷 裕 子

ギ タ ー：小 林 透 船 崎 薫 戸 次 脩 原 島 美 歩
山 本 雅 三 高 嶋 典 子 門 田 雄 二

リユートモデルノ：嶋 直 樹 石 井 啓 之

マンドロンチェロ：★小 川 眞 寿 美

コントラバス：石 黒 不 二 夫 ★清 水 威 志

(★=賛助奏者)

《第62回定期演奏会のお知らせ》

◎日時：2022年4月10日(日)午後2：00開演 ◎会場：第一生命ホール(晴海・トリトンスクエア)

連絡先：石 井 啓 之
E-MAIL：hi@ishii164.net
ホームページ：http://ostokyo.info/